

2022. 11. 28

県知事の来訪

森絃一

いろいろな事情がかさなって、今回の豊実行きは鉄路のひとり旅となった。「県知事が見えるというなら、豊実へ行きたい」。当初、東京ブロックに限らず、コスモ夢舞台の仲間たちは誰もがそう思っていた。しかし、調整ができた仲間はわずかだった。

8月の大雨の影響を受けた磐越西線は、いまだに新津と山都間の折り返しで、運行本数も制限されている。いつもはガラんとした4両編成が、行楽客と思しき家族連れや若者グループなどで、空席が目立たない。26日（土）正午前の新津発山都行の磐越西線は、ゆるるススキの穂を分けるように青空の下を進んでいく。並行する阿賀野川は波もなく滔々と流れて、晩秋の穏やかないつもの風景が広がっていた。

どういいきさつから県知事の来訪が決まったのか、詳しいことは不明だが、「縄文のアート広場」は完成したわけではない。特別な作品が展示公開されたわけでもない。すべてが未完のままに、名誉ある来訪を受けるのは珍しい。それだけに、個人と地域の元気を標榜する佐藤賢太郎とコスモ夢舞台としては、「里山アート展」から「縄文アート広場」の建設へとつないできた発想や企画意図が注目されたのではないかと憶測してしまう。だとしたら、大変ありがたいことである。

県知事ご一行は、予定通り午後3時前に公用車で到着された。それから約1時間、縄文の坂道を上って、ユキツバキの記念植樹をされ、3棟の竪穴式住居の一つ、食事処では、スタッフ手づくりの焼き芋をほおばるという一幕もありました。最後に、旧冬季児童寄宿舍の「佐藤賢太郎美術館」を見学、地元のご婦人たちとも挨拶され、阿賀町観光協会会長とも束の間、談笑されました。





ところで、迎えた佐藤賢太郎と仲間たちの輪に、背の高い二人の外国人がいました。会津大学のピシキン教授は目下、佐藤さんと意気投合され、親交を深めています。県知事とも応援団の立場で会話をされていたようです。一方、黙々と一輪車を操りながら坂道の道路補修を続ける逗留中のアメリカ人は、沖縄で働く25歳のハードメカのエンジニア。彼もまた、豊実の自然が気に入っています。お二人の出会いは豊実が起点です。



県知事が来訪された日の夜、点と点がつながり、深夜まで語り合いは続いたそうです。



電気関係がご専門の加藤さんとは久しぶりにお会いしました。最近では、石夢工房跡地のアトリエや美術館屋上の太陽光パネルはすべて加藤さんの手によるものです。コスモ夢舞台の建設作業には欠かせない存在です。その昔、和彩館の天井貼りに参加したことが、私と加藤さんの旧知の関係の始まりでした。



埼玉県の川口から出向かれた飯野さんは、会員仲間では若者。その上、ご当地への移住希望者ということで県知事にも紹介されたようです。今回、澤野県議会議員の秘書役のご子息とは同世代ということで、交流関係が生まれたようです。夜の和彩館に、国際縄文村の雰囲気を感じました。

新しい出会いによってつながった点と点が新しい流れをつくる。コスモ夢舞台の様々な活動も、まさにそうあってほしい。深まりゆく秋の気配はそのままに、佐藤賢太郎とコスモ夢舞台の持続可能な近未来図となってほしいものである。